

平成 27 年 3 月 14 日 (土)  
時 間 13 時 00 分～  
聞き取り者 K. K

聴き手：今日の聞き取りのテーマは、石狩アイヌに関することと現代に伝わるアイヌの伝統文化についてです。まず、自己紹介をしていただけますか。

K. K：〇〇年（1930 年代後半）生まれ、今年で〇〇歳（70 歳代後半）になります。K. K です。

聴き手：以前の家族構成を教えてください。

K. K：父は A. S1 (1900 年代後半生まれ) というアイヌの血をひく人で、母は I. S (1910 年代半ば生まれ) でした。兄が上に 1 人、下に弟が 4 人いたけど、1 人死んでしまったので 3 人でした。面白い話でね、私の母は比較的、裕福な和人だったから、アイヌと一緒に言ったって言われて勘当されたわけ。私が 17 歳くらいの時に、やっと勘当が解けたんです。一番下の弟が I. M っていうのだけど、生まれる前に父が亡くなってしまったから(それまでは父親の戸籍に入れなくてはいけなかったのだけど、できなくて)母親の戸籍に入ったのね。

聴き手：A. S1 さんは、どこの出身ですか？

K. K：石狩アイヌなんだけど、父親の親は顔を見たことも無いし、名字は忘れてしまったけど、母親が A 家のアイヌだったんです。いわゆる母系ですね、祖父は婿養子に入ったんです。その祖父はすごいヤキモチ焼きで、じっとしてられない体質だったみたいです。その祖父の兄と少しのあいだ、一緒にすすきので暮らしていたんですけど、その方もじっとしてられない人でしたね。夜にトイレ行ったんだなと思ったら、全然帰ってこなくて。すすきのから生振まで歩いて帰ったこともあるみたいだよ。ま

あ、私の祖父も足が強い人だったから、あっちこっち歩いて家には帰らないことも多かったみたいだけど、たまに帰ってきたらちゃんと子づくりはしたみたいで、祖父と祖母のあいだには長女（K1）、次女（T）、長男（A. S1）、次男（A. S2）と4人も子どもがいました。札幌にもう一人Aっていうのがいるんだけどね、A. S3 っていうのはA. Iの息子だから私の従兄弟にあたるよ。私の父はA家の長男だったんだけど、和人の嫁をもらったって言って、私の母親は親戚から逆差別がすごかったですよ。A. S2さんとか、その連れ合いのK2さんに「お嬢さん育ちだから何もできないな」とか、母親は私を産んでから、耳が悪くなってしまったのだけど、「働け！」…って言われてね、そして具合悪くなったら「××のくせに」と言われたり。かえって、他人に言われるほうが楽だったよ。他人はさ、機嫌が悪い時に「このアイヌが！」と言うけれど、ねちねちこないからね。K2さんっていうのもアイヌだったけどね、従姉妹どうしで結婚したからね。A家の曾祖母はA. Mっていうんだけど、A家の従姉妹だったね。

K. K：親も子どもの好き嫌いってあるからね、うちの父は母親に好かれてなかったね。A. S2さんのことは好きだったみたいだけど。その分A. MがA. S1のことをかわいがってくれたって言ってたよ。

聴き手：A. Mさんは、どこのアイヌですか？

K. K：生振あたりにいたみたいだよ。その後、居留地みたいの作ってくれたから、親戚一同で新十津川に行ったの。S3さんも親戚だし、I1さんもいたし、みんないたな。何年ぐらいかな、A. S2さんが生まれる前くらいかな。ワッカウエンベツなんて呼ばれているところだし、なんで行ったのかな、あんな悪いところに。農業もできないしね。畑も作れなかったから山にちょっとした家を建てて、木もたくさん植えたみたいだよ。うちの祖父が死んだ時に、私は深川に移ったの。

K. K：A. S1さん(K. Kさんのお父さん)が小さいとき、小学校はちゃんと行ってたみたいだけど、小学校3年生くらいの時かな、お父さんが死んじ

やって、お母さんが深川の I 2 さんっていうアイヌのところに後妻に入ったの。籍は入ってなかったんだけどね。I 2 さんは、と殺場に勤めて、おっかない顔してた。彼も連れ子がいたから、A. S1 さんには義理のお兄さんができたの。そのお兄さんが小学校、落第してしまって、自分が行かせてもらうには忍びないって言って、お肉屋さんに奉公に出してるんだよね。どこかは分かんないんだけど。

聴き手： どういう経緯で A. S1 さんと I. S さんは結婚したんでしょうか？

K. K： A. S1 さんは、旭川の M. U さんのところで木彫りを習ってたの。その人の長男は Y1 っていうんだけど、兄弟 2 人で札幌でクマの木彫りとか作ってたよ。でも 2 人とも札幌に地盤が無いから売りさばけなくてね、A. S3 のところに行ってたよ。F. T も A. S3 のところに行ったしね。

K. K： あのね、変な話なんだけど、A 家ってすごい美形なんだよね。お肉屋さんに何年か奉公に行ったんだけど、そこの奥さんが夜ばいしにくるんだってさ。そんなのに毎日来られると旦那さんも気がつくでしょ。そして俺、嫌だって逃げ帰ってきたの。

K. K： その後、あっちこっちのお土産屋さんでクマ作ったりしてて、うちの母は身体が悪かったから温泉治療をしてて、それでお父さんのことを知ってたんだって。だから、うちの兄は大沼公園のあたりで生まれてるし、私は深川で生まれたって。弟たちは札幌だけどね。

K. K： その当時はすごく大変で、私が生まれたのは 8 月でしょ？生まれる直前まで暑い暑いって言いながら芋掘りしてたって。そしてどっかからお見舞いに伯母さんが来て、父が「せっかく来てくれたんだからお酒買ってこい」…ってすごく遠くの商店まで行かされて…「なんで私が」…って思っ買いに行ったって話ですよ。でも、好きだから一緒にいたんだらうな。

K. K： 私が生まれて 2~3 ヶ月で札幌の N ビルのあたりに家を借りて住んでい

たよ。そのころも父は木彫りをずっとやってて、お寿司屋さんとかにある木彫りの「大入」っていうオブジェ(?)を作ってたよ。結構すすきのあたりでは有名だったみたいだよ。でも人が良かったからね、保証人になってばかりでした。けんかしてもその次の日には、「あいつ何してるかな～」って心配しちゃうみたいよ。

聴き手：家でアイヌのことを聞かされたことはありますか？

K. K：ないね、ないない。うちのばあさんもアイヌ語は話せたみたいだけど、私がいる時は一切話さなかった。A. Mも父親の母親も口に入れ墨入っていたけどね。祖母の時は禁止されてたんだけどね、友だちどうして秘密で入れたみたい。隠れて入れたかったんだろうね。A. Mは、手にも足にも口にも入れ墨してたよ。

聴き手：写真は残ってました？

K. K：だからうちの父は馬鹿なぐらい人が良くて、母は戦争前に三越とかいろんなどころに販売所を持ってたから、すぐにお金が貯まってね。すすきのの部屋を買おうとしたわけさ。そして父がね「俺、大家さんのところ行ってくるね」…って行って全部使ってしまったの、飲み代にね。そして、母が大家さんのところに行ったら「いや～来てないよ」…って。そして立退料も出せないけど、伏見のところに3年いさせてあげるから、家の中に誰も入れなかったら、土地も家もあげるって言うてくれてね。私が小学校5年生ぐらいのときかな。学校ではいつもいじめられたからね、先生に来るなって言われてね。私は行ってなかったけど。1年休んでも2年休んでも、一切、先生来なかった。戦前だからな。3年生の時に「終業式に出れば4年生にしてやる」…って言われたから行っただけ。小学校に上がる前から家のことはしてたからね。かけ算とか足し算引き算はやってたよ。兄の先生はとて素晴らしい先生だから、朝になったら迎えに来てたけどね。でも、私はいつでも背中と両手に弟がいたから。

K. K：さっきの話に戻るけど、父の知り合いとかが「2～3日でいいから置いて

くれ」って言いに来るんだけど、それが何年も何年も…しまいにはその知り合いまで来てね。だから大家さんが「またAさんやっちゃったね〜」…って伏見の家を追い出されたの。荷物は納屋にお願いして入れてもらって、12月28日ね。春に行ったら全部外に出されてて、桐のタンスとかね。だから写真とか、もうベチャベチャでだめさ。もう古い写真って無いんだ。

K. K : 私がアイヌだっていうのが分かったのは、伏見の家を追い出されて西長沼に引っ越してってから。親戚のI3さんっていて、そこにね。父はまだ死ぬまで木彫りをして、できたものを母が販売するって感じ。父が売りに行ったら、親戚一同でぜ〜んぶ使っちゃうから。

K. K : うちの母親は、人を使って商売してたから。木彫りの販売して歩いてき。昔、布の手提げが流行ってね、持つところは木なんだけど。昭和21年くらいかな。豊平川にサムライ部落があってね、そこにアイヌのおばさんがいて、その連れ合いにも手伝ってもらったし。木の部分はアイヌ文様入ってたよ。観光客用じゃなくて、一般向けのね。お母さん、だからすごくお金残したよ。父は、昭和19年に横須賀の海軍に行っていたから、私はずっと弟の面倒見ていたよ。中央長沼でもお米屋さんで奉公に行ったし。忙しくてやることも多くて、ものを覚える時間はなかったな。

K. K : 私が15歳の時に父が亡くなったんだけど、だから勘当が解けるまで母は一人で子育てしたのね。そのころから、桑園に移ってS貿易という会社で1日250円もらえて、そしてそのころ闇で米が1升250円で、1日働けば1升買えるみたいな。ちゃんと働かなきゃって思って随分働いたよ。兄も少しグレてたんだけど、父が死んでからは木彫りをやってたよ。

聴き手 : では話題を変えて、現代に受け継がれるアイヌの伝統文化についてお聞きします。幼いころからアイヌだとは言われていても、アイヌの伝統文化を伝承したわけではないんですよね？

K. K : そうですね。

聴き手：今は、何かしたいことありますか？

K. K：うーん、今、オヒョウの木の皮を持ってるからね、一生懸命カエカしてる（糸を縫っている）ところだよ。一生懸命頑張っても1日に300グラムぐらいかな。何年か前に、Y2ちゃんにサラニプ（編み籠）は習って作ったことあるけどね。

聴き手：じゃあ、自分がアイヌであることを肯定的に捉えられるようになったのは、いつですか？そのきっかけはありますか？

K. K：私はさ、いつも何かあれば「アイヌだアイヌだ！」と言われて、「うちの先祖は、なにそんなに悪いことしたんだろう」と思っていたよ。何悪いことやって、今こんなにいじめられるのかなって思ってた。先祖が悪いことしたのかと思ってた。アイヌが民族だって分かったのが遅かったな。

K. K：旦那にもね、アイヌの血が少し入っていたからな。木彫りの仕事をしたから、ちょっと意識し始めたかな。旦那も優しい人で、奈井江炭坑に兄がいたのだけど、炭坑には朝鮮人だとか中国人とかたくさんいたんだけど、日本人にいじめられるから「うちにおいで」と言ってあげたんだって。そしたら終戦で彼らが家に帰る時、家財道具かなんか置いてってくれたんだってさ。

聴き手：アイヌの伝統文化に関わりたいとか、習ってみたいという気持ちはありますか？

K. K：習ってみたいけどね、もう手が動かないから。この前もトンコリ（アイヌの弦楽器）習ったんだけど、からきし。

聴き手：習ってみたいという気持ちはあるんですね。それはどうしてですか？アイヌだってことを嫌ではないんですか？

K. K : 私、小さいころからアイヌであることを嫌だと思ったことはないよ。

K. K : 私が 19 のころかな、母親から結婚したほうがいいって言われてね、隣の 11 ぐらい上のチンチクリンと夏に映画を見に行ったらわけ。私、タンクトップ着てたんだけど「K. K ちゃんまだ 19 歳だけど、メノコ（女性）は年取るの早いから早く結婚したほうがいいよ。良かったね」…って背中に入れて言ってきたの。なにこいつと思って断ったの。そしたら次の日ね「K. K ちゃんアイヌだから振ってやったんだ」…って言い回されたの。その週のうちにその人、新しい彼女連れてきて見せびらかされたよ。洋裁のできるすごくいいお嫁さんだったよ。

聴き手 : じゃあ、アイヌだってことを嫌だとは思ってなかったんですか？

K. K : そうだよ。

聴き手 : 息子さんたちは、アイヌの伝統文化とかやっていますか？

K. K : 嫌気がさしてるみたいで、「俺はもう関わらないよ」…って言ってるよ。孫とかには「お前もアイヌだろ」…って私は言うんだけど「ああ、そう？」みたいな感じだね。下手に言ってけんかする必要もないしね。私の子どもはね、5 人いて年子なんだけど「お母さん、今日アイヌのこと習ったよ」…っていうから話してごらんって言ったんだ。そしたら「あのね、昔ね…」…っていうから「昔ってなにかい？今はいないのかい？」…って言うわけ。「昔いたものが、ピタっといなくなるわけなんてないんだし、お母さんアイヌなんだよ」…このやり取りが 5 年続くわけ。だから言うてはあるんだ。

K. K : イベントとかもね、小さいころからじゃなくて高校生くらいになってたから、アシリチェプ（新しい鮭を迎える儀式）とかが始まったから。連れては行けなかったな。最初はうちの家の前で、魚とかジャブジャブ洗ってたから、子どもたちはいい思い出ないんじゃないかな。ご飯も他人

が先で、子どもがあとだったからね。大騒ぎしてるから2階に行かせた  
り。

聴き手：じゃあ将来、社会がどうなっていけばアイヌの人が生きやすい社会に  
なると思いますか？

K. K：うーん、そうだね。私も絶望的になっているのだけどね。昔から全然進  
歩してないよ。まだどこかの博物館に、自分の弟の実名が旧土人保護法  
の説明の写真とかに載っているみたいだしね。

K. K：先生の対応とかは、良くなっているのかな。知らないけど。

K. K：私が思うのは、他人の土地に来てね、どうしてそんなに大きな顔してい  
られるのかって話。政府が「先住民族として認めました」…って言うけ  
ど、私にしてみれば一言の挨拶も無いよ。アイヌ予算とか言っても、ほ  
とんどアイヌは使えてないよ。復興予算も一緒だよ、どんだけついても  
部署で消費して下にはおりてこないよ。

K. K：推進機構（アイヌ文化振興・研究推進機構）の説明会でもそうだったけ  
ど、例えば静内のシャクシャイン祭に行くのでね、民族のあれだから行  
くのは行くけど、日当として出すなら馬鹿にしてないかかって話。